

[039] 経済學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4403571>

出版情報：経済學研究. 39, 1974-03-31. Society of Political Economy, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



序

学問の方法が真理に至る途である限り、その進展に臨んでは、常に方法論への沈潜が不可避であった。これは、学問の歴史のみずから教えるところであろう。高木幸二郎先生は終始一貫、経済学批判体系の方法論的省察に全霊を捧げられたのであるが、これこそ先生が真理のあくなき追求者たる何よりの証左である。世にいう「プラン問題」を真正面から受けとめて、透徹した論理、精緻を極めた論証、鋭い洞察をもって、方法論の至大の意義と『資本論』の真髄を深く究められた。

先生は、昭和13年わが経済学部の前身である法文学部経済科を卒業、いくつかの研究調査機関を歴任し、一時は軍籍に在って辛酸を嘗められたと承るが、その間いよいよ研究への熾烈な意欲に身を焦がされた。とくに世界大恐慌という動乱の時代にあって、畢生の研究課題を恐慌理論の体系構築に求められたように思われる。こうしてこの時期、『恐慌論体系序説』に結晶する壮大な構想を明確な方法論にもとづいてつくりだされた。

戦後、先生の理論体系は、学界に清新な胎動を告げて巨大な地歩を占め、われわれ後進の輝ける道標となった。先生は、中央大学商学部在任すること数年、昭和32年の春、懇望されてわが経済学部教授に就任、景気変動論を講じられ、数年後には経済学原論講座をも担当されて今日に至ったのである。このような御経歴からすれば、先生は必ずしも安穩な象牙の塔の学究生活だけに終始されたわけではなかったが、しかしそれだけに、現実的観想からする広い視野にたたれることができた。恐慌理論の体系化に挺身された所以である。

先生がわが経済学部・経済学会の学苑にあって残された多数の労作は、理路明晰であるだけではない。一字一句が丹念に吟味され、厳正に選り抜かれていて深い含蓄に満ちている。なかでも『経済学批判要綱』の訳業はその象徴である。われわれはここに、学問研究の厳しさを教えられた。また格調高い筆跡には先生のロマンチズムが秘められている。その俤が慈愛深い温顔に漂い、われわれを魅了してやまないのである。

先生の還暦を記念して企画された本論文集が、ようやく実を結ぶ運びとなった。それにしてもこんなに遅れて、遂にご退官への餞けともなってしまったことを、深くお詫び申しあげねばならない。

幸い先生には福岡の近郊、油山の麓にあってますますお元気である。今後ともいっそうの御活躍を祈念し、変ることのない御指導と御鞭達をお願いする次第である。

昭和49年10月

九州大学経済学会長

秀 村 選 三